印度雑記帳

伊勢　司

たかが窓、されど窓

前回は、僕が三年間学生生活を送ったインドはバラナシ（ベナレス）の紹介。そして「一人暮らしの始め方。インド・バラナシ編」として部屋を借りるまでの話を紹介しましたが、今回はその続編です。

さて、僕は2DKで家賃月六千ルピー（約一万一千円）の部屋を借りました。この建物には四世帯が住めるようになっており、他にインド人家族や、出稼ぎに出てきた三人組が共同生活を送っていました。ですのでインドの相場でいうと、バラナシで一人暮らしをするには少し贅沢な部屋ということになるでしょう（ちなみに首都デリーで同じ間取りだと二倍くらいの家賃）。では、部屋の中はと言いますと、まず玄関で靴を脱ぐスタイルが一般的。そして玄関から家の中まで段差がなく、タイル張り（またはコンクリート打ちっ放し）という家がほとんど。これは砂埃が溜まりやすい土地のため掃除のしやすさ、そして夏は45度を超える暑さをしのぐための工夫であると言えます。あとインドならではの特徴として、給湯器が備え付けではありません。シャワーも基本的には一年中水浴びなので、最低気温が0度近くなることもある十二月や一月ではインド人でもよく風邪を引いています。解決策としてお湯を浴びたければ、ギージャル(Geyser)という水を温める灯油ポリ容器ほどの大きさの鉄製タンクを浴室に設置します。使う前に電源を入れると数十分で温まるといった仕組みです。

それにしても、なぜ給湯器のことをギージャル（Geyser）と言うのかは誰に聞いても未だに謎です。「Geyser」とは日本語では間欠泉のことで、地下の地熱で温められた水が噴水のように地上に飛び出すことを言います。アメリカのイエローストーン国立公園や日本でも長野県の地獄谷温泉が有名です。ひと昔前のインド人は、地球の神秘にも似た驚きをその小さなタンクに感じたのかもしれません。インド人もびっくり！オー、ギージャル!!

ところで、僕の借りた部屋には「窓」がありませんでした。入居日になっても、部屋のリフォームが終わっておらず、そのため「窓枠」のみでの入居となりました。そのときは九月末で雨季もひと段落、暑過ぎず寒過ぎずのちょうどいい季節。そして、家主からも「あとは格子とガラスをはめ込むだけ、一週間もあれば完成するよ」とのことで、僕もそれに異論なく住み始めました。それから数日経ったある日の朝。一人のおじいさんが訪ねてきました。多くを語ることなくおもむろに取り出したものさしと鉛筆。僕にはこの人が窓を仕上げるのかと不安しかありません。一方でおじいさんは悠長に窓を測り、それを使い古された一枚の紙に書き込んでいきます。二箇所の開き窓を測り終えると「バブー（坊ちゃん）、また明日来るね」と言って帰って行きました。次の日も、またその翌日もおじいさんは朝七時半に来ます。そして、初日に採寸した窓をまた測っては、新たな紙に書き込みます。僕はさすがに三日目の帰り際に勇気をもって聞きました「なぜ、毎日同じところを採寸しているんですか」。すると、おじいさんは「僕、採寸、書いた紙を無くしちゃうんだよ」とハニカミ笑い。ハニカミ笑いのその口に上の歯はなく、下の歯が二本だけというとてもチャーミングな方でした。もちろん心の中で叫びました「おじいさん、歯はなくしても紙はなくさないでよ…」。窓の仕上げ、日本であれば半日作業でしょう。しかしここはバラナシ。完成までに二カ月を要しました。窓ができるころには季節も変わり、あまりの寒さから家の中で焚き火もしました。「たかが窓、されど窓」、窓のありがたさを身をもって知ることとなる、インドで迎えた冬の季節でした。

窓枠越しに見える寺院には毎日多くの参拝者が集まる

いせ・つかさ　1988年生まれ。同志社大学商学部卒。バラナシ・ヒンドゥ大学 観光経営学科 修士課程修了。インド政府公認 旅行業務取扱管理者。